

バートランド・ラッセルの紹介を通して見た『改造』の対中国認識

Perception of China in the Japanese Magazine Kaizo:
From the Perspective of Publications by Bertrand Russell

許 丹 青

XU, Danqing

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第48号 2019年12月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.48 2019

バートランド・ラッセルの紹介を通して見た『改造』の対中国認識 Perception of China in the Japanese Magazine Kaizo: From the Perspective of Publications by Bertrand Russell

許 丹青 (XU, Danqing) *

はじめに

20世紀初頭のイギリスを代表する哲学者、論理学者、数学者として知られているバートランド・ラッセルは、イギリス国内の社会問題について意見を述べるとともに、国際的な問題にも関心を示していた。1920年代に彼はロシア、中国、日本を訪問する機会をもち、そこでの体験に基づき、1922年には『中国の問題』という著書を出版し、中国、日本の社会問題について探究を繰り返し続けている。とりわけ、彼の中国、日本に滞在した経験は、彼の中国・日本に対する見解を大きく変え¹、同時に、後述するように、中国・日本に大きな影響を与えることになった。一方、19世紀末以降、中国の知識人たちは自国の衰弱の原因を分析し、国の振興を図るために、西洋文明に学ぶ努力を積み重ね続け、特に1919年の五四運動以降は、梁啓超をはじめ、中国の知識人たちが、改めて積極的に西洋の思想家を中国に紹介していた。1920年10月から翌年7月までラッセルが梁啓超の招きに応じて中国で学術講演を行ったのもその事業のひとつであったのである。そのラッセルは、同時に、当時社会主義的民主主義の動きが活発化していた日本においてもすでに高名な人物で²、帰国途中に改造社の社長山本実彦の招聘により、日本で訪問講演をしたのであった。

改造社は、ラッセルを日本に招聘するために、編集長である横関愛造³を派遣し、北京で交渉を行わせた。この旅について、横関愛造は、次のように述べている。

「私が、改造社同人を代表して、博士招聘のため北京に着いたのは、一九二〇年初秋、楊柳の黄ばんだ北京の街々が、古都の静寂さ身にしみるような朝であった。前門駅に着くと、その

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程

¹ 例えば、ラッセルは「ギルド社会主義」が最も弊害の少ないものとして主張していたが、中国に行くと、中国の実情に応じ、中国において「国家社会主義」が相応しいと提案した。この点は哲学者としてのラッセルの思想の複雑性の現れであったと同時に、中国の現実がラッセルに与えた影響の現れでもあった。

² ラッセルの来日以前に、すでに長谷川如是閑「ラッセルの社会思想と支那」(『読売新聞』、1920年11月10日から1920年11月16日まで)、吉田静致「ラッセルの愛国心論を讀みて」(『東京朝日新聞』1921年2月13日から1921年2月15日まで)など、彼に関する記事が書かれていた。

³ 横関愛造：「東京毎日新聞」編集長をへて、1919年創刊の「改造」に参加して初代編集長となる。1950年改造社代表取締役就任。

足ですぐに公使館に、小幡西吉公使を訪ねた。」⁴

ラッセルは1921年7月に日本に到着後、日本の各地で講演を行う予定であったが、北京滞在中に病気になる、なお衰弱が甚だしかったため、7月29日ようやく「文明の再建」と題する講演を行うことになった。この講演について山本実彦は「彼の生涯中でも一、二に位する上出来のもので、彼に同感を持たないものまで、賞讃していた。(中略)彼は、経済的・政治的観察も鋭いのであるが、その底に、哲学的・基礎的の深い見方が伴うので、走馬燈のごとくかわって行く我が思想界に一ばん長い生命があったわけだ」⁵とのちに評価している。

ラッセルは大きく変化しつつあった露・中・日三国の政治、社会、生活の実状を外部者として観察する経験をもった著名人であった。彼の見た日本・中国の違い、また、彼の観察に対し、1920年代の中国・日本の思想界がどのように反応したのかについてはすでに一部の研究者が関心を寄せている。⁶しかし、ラッセルを招聘した肝心の改造社がどのように彼の中国観、日本観を利用していたのか、結局読者に何を届けることになったのかについてはまだ踏み込んだ研究がなされていない。本研究では改造社の雑誌『改造』に掲載されたラッセルの文章を通じて、日中両国がラッセルの中国観・日本観にどのように反応し、また、その中国観・日本観のどの部分を必要としたのかについて考察してゆくことを目的とする。

1. 国家観と愛国心

『改造』が最初にラッセルに注目したのは、彼の政治に関する観察眼で、1920年10月に中沢臨川⁷が翻訳した「政治の理想」という名の文章を掲載している。⁸そして、ラッセルの政治に関する観察眼に注目したその基準はその後『改造』に載せられた彼の文章にも踏襲されてゆくことになる。ラッセルは山本実彦の依頼をうけ、1921年1月号の『改造』に特別寄稿として「愛国心の功過」を

⁴ 横関愛造『思い出の作家たち』（法政大学出版局、1956年）。

⁵ 山本実彦「ラッセルの来朝」『出版人の遺文 改造社 山本実彦』（栗田書店1969年）。

⁶ ラッセルの見た日本・中国の違いについて、家坂和之「ラッセルの見た中国と日本」（『日本文化研究所研究報告』1980年）、内野末雄「ソ連・中国・日本—B・ラッセルの分析によせて」（『二松学舎大学論集』1981年）において言及されている。さらに、三浦俊彦はもう一步を進め、「バートランド・ラッセルと中国・日本」（『比較文学』1987年）において中国・日本の思想界がどのように反応したのかについて言及している。また、中国の思想界の反応について、馮崇義の『羅素与中国：西方思想在中国的一次経歴』（三聯書店1994年）にも言及がある。

⁷ 中沢臨川は文芸評論家であると同時に、社会問題にも発言している。改造社の依頼により、ラッセルの「政治の理想」を翻訳するほかに、中沢は社会主義批評に関する文章も寄稿していた。例えば、『改造』1919年12月号に「社会民主主義是非」がある。また、中沢臨川の著作『新社会の基礎』（1920）、『嵐の前』（1921）が改造社から出版された。

⁸ 原作「Political Ideals」は1917年に書かれたものであったが、『改造』がこの文章を掲載したのは、大正デモクラシーの風潮をうけて、ラッセルの思想の適用可能性を探るためだと考えられる。

寄せた。それ以降、ラッセルは1923年9月まで計15回に渡って政治評論の文章を寄せることになるのだが、⁹その最初的一篇である本篇はタイトル通り「愛国心」に関する文章であり、その号の巻頭言とよく呼応したものとなっている。

巻頭言「済世の誠意、救国の功利」の冒頭には、次のように記されている。

「世は社会だ。国際的社会が唯一の社会だ。国は社会の一要素だ。国際的社会は各国に多少内存し、列国に皆存する。立国の意思は、国際的社会を、成るべく多く自国の内に発見し得る位置に進達する目的の追求であるべきだ。立身の意思が、成るべく多く国家社会を自己内に発見し得る位置に進達する目的の追求であると同理だ。自愛が愛国である如く、愛国は愛社会であるべきだ。自愛の一念を解放すれば、人は適当に愛国者ともなり、愛社会者ともなる必然的約束を有する。国の外難を救ふ途は、国の内弊を改革するにある。」¹⁰

この冒頭文によれば、「国」について考える時、重要な観点は、それが「社会の一要素」であり、その「社会」とは「国際的社会」であるということである。そういう社会において個人、及び各国の諸要素に応じて、社会の中の人々がどのように国内の「内弊を改革」すべきか、社会の中の各国がどのように他国と接すべきかなどの問題が生じる。この巻頭言により、『改造』の国家の理想態についての理解と位置づけをうかがうことができる。

国家に対するこうした理解は、国内の改革を重視することにつながる。そうした論調は『改造』にのみとどまることなく、例えば、1919年12月『中央公論』において、室伏高信が「改造論の一年」と題して、その一年間にさまざまな「社会改造論」が一斉に噴出してきたことを伝えていることから分かる通り、一種の流行となっていた。¹¹ちょうどこの年に、改造社が発足し、新雑誌の題名に『改造』を選んだのも、その流れに沿ったものであった。¹²国内の改革を重視する『改造』のスタンスにはまさにこの時期の特徴を色濃く反映している。

また、国際的社会において日本がどのように他国と接すべきかについては、

「国際的社会を、わが宝と視る智眼あらば、撃退と防守とに忙しい手は、進取と攻略とに仕事変へしよう。国際的社会のために正善真美を進取するのだ。国際社会のために利益幸福を攻

⁹ 以下、『改造』におけるラッセルの文章の掲載データについては、後掲の付録を参照。

¹⁰ 本稿での引用は、基本的に旧字は適宜新字に改め、圏点・ルビ等は省略することとする。なお、省略する箇所は（中略）で示す。以下同じ。

¹¹ 飯田泰三『大正知識人の思想風景—「自我」と「社会」の発見とそのゆくえ』（法政大学出版局2017年4月）。

¹² もっともその姿勢は一方で編集方針で「現在許されている「社会政策」の線に添うこと」（関忠果編『雑誌『改造』の四十年』光和堂1977年5月）と述べる通り慎重なものでもあった。

略するのだ。」

と巻頭言で述べた。

この巻頭言では「撃退と防守とに忙しい手は、進取と攻略とに仕事変へしよう」と述べている。それが意味しているのは、国際社会の一員として、積極的に大勢に順応し、偏狭的なナショナリズムをうちやぶって、「正善真美を進取」し、自国と他国を結びつけながら、「利益幸福を攻略」する、というものである。

一方で、同号にラッセル寄稿の最初の文章として掲載した「愛国心の功過」の文章を通じて、『改造』は「愛国心」についてどのようなあり方を提示しようとしたのであろうか。

「愛国心の功過」では、愛国心を「吾人の行為を支配する幾多理想中の最強思想である」と位置づけ、この初心の功は「外来の不正の力もしくは暴圧」に抵抗する砦となり、しかしながら、この初心の罪は「自国が他の各国に比して遥かに優等国である事、随って自国と他国とが争ふ場合には、必ず自国を勝たさなくはいけない事を信じさせられる」ことであり、「必ず他国の独立に対する侵攻として打ち続く」と論じた。

「愛国心の功過」の中でラッセルは中国と日本に言及し、中国は「愛国心未発達期の状態」にあり、一方、日本は「十分愛国的になった」と述べ、さらに愛国心が日本に不利にもたらすことも指摘した。彼は「もしも日本が、或は他のいかなる強国なりとも、或限度を超えて支那侵攻に耽るならば、愛国心は、遂に支那にも喚起されるかも知れない」と述べ、愛国心を軸として日本の対中政策、対中姿勢について鋭い指摘を行った。

結果的にラッセルは、中国においては愛国心や敵愾心の鼓舞をはかり、日本においては愛国心を過度に強調することのないよう、両国における愛国心の機能と問題点に対してそれぞれの見解を示すことになったのである。そもそもラッセルは当時の愛国心を賛美する風潮に対して懐疑的な立場をとっていた。第一次世界大戦を経て、ラッセルは破滅的な戦争を導いた社会制度と人間性について考え続け、1916年には彼の一連の講演に基づき、『社会改造の原理』(Principles of Social Reconstruction)が刊行された。その中で、ラッセルは「宗教としての愛国心」は普遍性を失い、教育によって、偏狭な「ナショナリズム」が国民に持ち込まれることになり、「熱狂的に他国民が蒙る損害に対しては無関心となる」と非難している。¹³すでに愛国心が強い日本に対して、ラッセルはその危険性の認識の必要性を訴えたわけであるが、一方いまだ愛国心に乏しい中国に対しては、その「初心の功」に期待するという姿勢を示し、しかもその「初心の功」を発動させるのが日本の愛国心であるという指摘は極めて正鵠を得たものであったといえる。1921年1月号の『改造』の巻頭がそうしたラッセルの指摘を載せた点に当時の『改造』のスタンスがよく現れているといえよう。

しかし、ラッセルのそうした観点は当時の日本人に届いたのだろうか。倫理学者である吉田静致

¹³ 村上啓夫訳『社会改造の原理』(『世界大思想全集45』春秋社1929年5月)

は「愛国心の功過」に対して、「ラッセルの愛国心論を読みて」¹⁴を書き、異なる観点を示している。吉田は、「愛国心は、人はいつでも自国の利益を目的として行はなくてはいけない」と「自国のために尽くすことが己れのために尽くすことと共に排斥すべし」をラッセルの主張として扱い、この論旨を「謬見」であると述べている。吉田からみれば、なぜラッセルの主張は「謬見」かということ、「自己中心的なる単なる特殊主義の愛国心か然らずんば一切の特殊的差別を無視する抽象普遍的なる世界主義か、其孰かでなければならぬなどと偏狭に考ふる如きは、精神生活の真義に盲目であることを表白するに過ぎぬ」からである。それに、吉田はロシアの哲学者ソロヴィヨフの言葉を引用し、真の愛国心は「他国に対して憎悪の念を有つ限り決して真に善なる国家と云ふことが出来ない。他国を己れの如く敬愛せざる国家は真に善なる国家と云ふことが出来ない。真の愛国者の道徳的義務は、善に於て国家に奉仕するといふことである。(中略) 真の愛国者の道徳的義務は人道に於て国家に奉仕し国家に於て人道に奉仕する」と解釈しているのである。吉田にあって、ラッセルのいう愛国心は特殊主義の愛国心であり、真の愛国心は、善を積んで悪念を持たないという普遍的愛国心である。この視点には、一見して人道主義的な発想がうかがえるが、一方で、彼は、明治天皇御百首の「国のためあだなす仇はくたくとも 慈しむべきことな忘れそ」を引用し、「戦争が必要である」の結論をも導き出すことになるのだった。この吉田の学説は奇矯なものに見えるが、1930年代の日本においては結果として実践され、ラッセルの平和主義の影響がやがて消え去ってしまうのは我々のよく知るところである。

2. 社会改造

近代国家が発展を図ろうとする時、当然そこには国内要因と対外要因の二つを考慮する必要がある。1920年代日本における国内問題とは、民主主義の運動や労働運動の形をとって現れた新しい社会主義の風潮の中で、どのように社会改造を行うかという問題である。また、対外要因とは、第一次世界大戦後の大國間協調主義にもとづき日本の国益を追求するというものであった。この時代の認識に関して、『改造』は主として社会問題に焦点を当てながら、中国とロシアの社会主義的民主主義の運動や労働運動に関心を示した。ラッセルは露・中・日三国の政治、社会、生活の実状を観察した一人としてももちろん改造社に期待される人物であった。社会改造の声が広がって議論が紛々と起こる1920年代を背景として、ロシアに対してどのような政策を取るべきかを分析する文章を掲載したほか、『改造』はラッセルが書いたロシアにおける社会改造に関する文章も掲載している。例えば、1921年2月「過激派ロシアの前途」、1921年4月「社会組織の良否の分岐点」、1921年10月「工業主義と国家主義との相互作用」、1922年5月「未開国に於ける社会主義」、1923年「機械主義に対

¹⁴ 1921年2月13日から1921年2月15日にかけて、朝日新聞で吉田静致の「ラッセルの愛国心論を読みて」と題した文章が連載された。

する抗議」の中では全面的、もしくは部分的にロシアがとりあげられている。

当時のロシアを考える時、革命勢力に対しては「過激派」、「独裁政治」というイメージが強かった。社会主義運動に対して共感と支持の態度を示していたラッセルから見れば、ロシアの「過激派」は「新しき理想の中堅」だということになる。¹⁵「過渡期に於てはデモクラシーに反対するポリセキでさへもこれを以て彼等の理想の一部分と看做し」¹⁶、専制政治は、ボルシェビズムの理想を実現するために、専制的に支配することを余儀なくされたというのである。しかし、「社会主義は、普通選挙、言論及び出版の自由の如き、自由主義的、民主的な制度を回復し得た後でなければ十分に実現し難い」¹⁷というのが現実であり、独裁政治は自由を確保することができず、そのために「創造衝動」¹⁸に基づき社会改革を行う必要があるとラッセルは主張していた。「社会組織の良否の分岐点」の中で、この理論は展開されている。

「我々が創造しようと努めなければならないものは、希望と欣びとに充ちた世界なのであって、主として人々の悪しき諸衝動を抑圧しようがために案出されたやうな世界なのではない。」¹⁹

ロシアの社会主義革命に対するラッセルの発言を総合すると、ラッセルはロシア式の国家社会主義のもつ専制、集権の欠陥を認めながらも、未開国が工業化を達成するために、有効的な手段であると認めてもいたが、個人の創造衝動を抑える点では反対し、民主主義の立場にもとづいた社会改造を目指すべきと考えていた、とまとめることができる。

他方、中国の改革に関して、ラッセルが「若し支那にして（これは決して不可能でない）遠からず共産主義者に支配せらるることとなったなら一農民を満足させるレーニンの新しい方法が成功するものと假定して一亜細亜と露西亜とが欧羅巴と亜米利加との気に入らぬ方向に発達し、社会主義の基礎の上にその経済的独立を確立するようなことに終るのも不可能でない」²⁰と述べていることは、この段階のラッセルがロシア式の国家社会主義を中国にとって良い改革方法だと判断していたことを物語る。

もちろん、ラッセルの論調に対して日本の学者たちが完全に賛同したわけではない。1920年12月

¹⁵ 1921年2月号『改造』「過激派ロシアの前途」。

¹⁶ 1922年5月号『改造』「未開国に於ける社会主義」。

¹⁷ 1922年5月号『改造』「未開国に於ける社会主義」。

¹⁸ ラッセルによれば、二種類の「もの(goods)」とそれに対応する二種類の衝動とは区別できる。即ち、共有しえない物を入手したり、保有したりしようとする「所有衝動」と、隠したりまたは私有する必要のないものをこの世の中にもたらしたいという「創造衝動」がある。(牧野力編『ラッセル思想辞典』早稲田大学出版部1985年5月。

¹⁹ 1921年4月号『改造』「社会組織の良否の分岐点」。

²⁰ 1922年5月号『改造』「未開国に於ける社会主義」。

の雑誌に、ある無名氏の文章「支那に於けるラッセル氏」が掲載された。その文章の中に、「氏は過激主義には一種の宗教的性質が具有されて居ると唱破し、此主義が完全に行はるれば戦争は回避せられ、生活は平均せられ、覆滅に瀕しつつある資本主義は再興を絶つが、しかし私は未だボルセイズムには十分に賛同しない」と述べている。ラッセルがロシアのボルシェビキの発展の必然性に期待を持つのに対して、この文章の作者は「ボルセイズムの研究は細心を要すべき」と懐疑的な態度を持っていた。実際に日本においてボルシェビキの動向を危惧するのはこの文章の作者だけではない。1920年11月10日から1920年11月16日にかけて、読売新聞で連載された「ラッセルの社会思想と支那」と題した文章の中で、長谷川如是閑は中国の現状へのラッセルの思想の適用性に対して疑念を洩らしている。²¹

ラッセルは日本に滞在中、京都、東京で、学者たちと懇談した。そのときの模様が「ラッセル教授の印象」²²と題されて、『改造』1921年9月に載っている。この懇親会に参加した土田杏村は実際にラッセルが日本に来る前にすでにラッセルに対して関心を持っていた。例えば、1921年7月号の『改造』に彼の「ラッセルの哲学」が掲載されている。そして、ラッセルと会見できた杏村はラッセルと哲学および社会改造などについて討論することになった。「ラッセル氏と露国及日本を語る」にはこの討論が記載されている。ラッセルはその中で「独裁主義は現在の露国としては寧ろ適当した政体であるかも知れない。東洋諸国もデモクラシイの榮え得ない国である。此処にも亦××××²³が適当して居る」と述べている。いうまでもなく、東洋の一員として、この「東洋にデモクラシイが実行し難い」という意見には、土田杏村は反対な意見を示している。談話の中に思想自由の問題のテーマについては一定の折り合いがついたが、社会主義と理想主義の結合を目指していた土田杏村はラッセルがロシアの過激行動及び独裁主義を容認する態度を示したことに對して反対の姿勢を崩さなかった。

『改造』に掲載されていたラッセルの文章を読んでもみると、大正デモクラシーの動きの中で、ラッセルの哲学研究より、社会主義者として彼の論説のほうが『改造』の関心の的となっていたことがわかる。社会改造の諸説は日本の社会発展及び中国の行く道にかかわっているからこそ、日中両国の思想家たちはラッセルに関心を寄せたのである。しかし、中国、日本の学者たちがラッセルの社会主義諸説を受け入れることはなかった。張東蓀²⁴はラッセルの「Roads to Freedom」(1918)を読んでからギルド社会主義者になった。しかしラッセルが中国においてロシアの「国家社会主義」

²¹ 長谷川の疑念については、三浦俊彦「バートランド・ラッセルと中国・日本」(『比較文学』1987年)に詳しい。

²² この特集の中に西田幾多郎「学者としてのラッセル」、土田杏村「ラッセル氏と露国及日本を語る」、桑木或雄「文明は寧ろ一様性」、北沢新次郎「ラッセル及其の一行」、大杉栄「苦笑のラッセル」、桑木巖翼「鋭角的人物」が収録されている。

²³ 原文が削除された。

²⁴ 張東蓀は影響力のある中国の思想家であり、中国に西洋思想を紹介することに力を尽くした。彼の哲学思想や政治思想はいずれもラッセルの影響を受けていた。

が相応しいと提案したことは張東蓀を失望させた。²⁵また、日本の学者たちも必ずしもラッセルの論調を賞賛していたわけではないことは先に確認した通りである。まさに三浦俊彦が指摘しているように「すでに近代国家として一応の成熟をみた壮年日本は、世界大戦後の動揺からも超然とした位置にあって、ラッセルの社会思想等を真に必要としているとはいえなかった」²⁶のである。

3. 東西文明の論争と文明批評

どのような社会改造の展望においても、文明的視野を根底に置く政治改造論が存在し、どのような政治理論も、文明論につながる側面をもつだろう。前節で述べたように社会改造に関する文章を掲載していることから、『改造』の論調には「現代」社会の問題への関心が読み取れるのだが、そこにはどのような文明論が読み取れるだろうか。

そもそも文明論は欧米で研究され始めた概念である。近代日本の場合、福沢諭吉ら明治の啓蒙思想家たちの紹介により登場するようになり、ナショナリズム意識と結びつくという特徴を呈する。1920年代に入って、明治ナショナリズムの意識が解体して、大正デモクラシーの風潮が登場し、また「社会問題」、「労働問題」が活発化すると、文明をめぐる論争は社会評論や時局解説の性格を帯びるに至った。一方、近代中国の場合、梁啓超により日本経由で「文明」という価値観が翻訳、紹介された。五四運動は中国の民族運動であると同時に、社会主義運動の出発点でもある。五四運動を経て、旧来の文化と西洋のものが激突する状況下で、東西文明をめぐる、中国がどのような文化を基盤にすべきか、どのような道を選んだらいいのかについて論争しながら展開されることになった。特に1920年前後、デューイ、ラッセルなどの来華により、中国の知識人や若者の間で文明に関する論争が一層盛んに行われることになった。では、1920年代における東西文明が激突するという状況下で、日中両国はラッセルの議論のどの部分を必要としたのか、そして『改造』はどのように東洋の古典文明の本家である中国を見たのか。

1920年代において一貫して中国に関心を持ち続けていた改造社はラッセルが観察した中国のことを紹介するために、1922年4月号の『改造』にラッセルの「支那の国際的地位を論ず」、および同年の8月号に「支那文明と西洋」を掲載した。現代中国及び「ヤング・チャイナ」に期待を寄せた『改造』の姿勢についてはすでに拙稿「1920年代雑誌『改造』における対「中国」言説-「ヤング・チャイナ」²⁷をめぐる」で論じたが、『改造』は同時期にラッセルによる「古い」中国に対する称賛も掲載したのである。「支那文明と西洋」の中でラッセルは中国の儒教、道教、仏教と西洋の宗教を比較しながら、中国の文明と西洋の文明の一つの大きな相違点は科学であると述べた。そして、最後に「東西の接触は双方に有益である」と主張した。近代の中国文明が西洋文明に劣るという一

²⁵ 馮崇義『羅素与中国：西方思想在中国的一次經歷』（三聯書店1994年）。

²⁶ 三浦俊彦、前掲論文。

²⁷ 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要 (45)、2018年3月、P197-208。

般的な認識と違い、ラッセルはむしろ西洋文明を批判するという姿勢をとっていた。

「支那人の寛容は、欧洲人が自国での経験から推して、到底想像し難い底のものであると私は考へる。吾々は自分らの祖先よりは寛大なので、自分達は寛大な者だと想像する。然し吾々は尚ほ政治的及び社会的迫害を行ひ、更に其上、吾々の文明と吾々の生活方法とは、他のいかなるものよりも無限に優れたものであると堅く確信し、そのために支那人のやうな国民に出遭ふとき、吾々が彼等に対してなし得る最も親切なことは、彼等を吾々自身のやうにすることだと考へるのである。私は此の考へは非常な間違だと信ずる。一般の支那人は、慘憺たる、貧苦の中に居ても、一般英国人より幸福である、それは支那の国民は吾が英国人よりも人道的な、文明的な考へ方の上に立って居るので、より幸福なのだとは私は信ずる。動揺と喧嘩好きとは、表面に現れた災害を醸すに留まらず、吾々の生活を不平満々たらしめ、美を享楽する能力を奪ひ、瞑想に伴ふ美德を不可能にする。此の点に於ては、過去百年の間に、吾々は急激に悪くなつてしまった。」

中国の寛容、平和的、忍耐強いなどの美德を称賛するラッセルはまさに中国の古き美を見出している。

この文章と呼応するように、1926年7月号の『改造』にはラッセルが『中国の問題』（1922年）の中で「ヤング・チャイナ」として称賛した胡適の「近代西洋文明に対する吾人の態度」が掲載されている。その中で胡適はラッセル的な姿勢とその影響に対し、客観的で皮肉も籠めた批判を加えている。

「欧洲大戦の影響として一部の西洋人は近世の科学的文化に対して一種の嫌悪的反感を抱く様になり、従て西洋の学者中にも東方の精神文明を崇拜するやうな議論を為す者を時々耳にするのである。併しこの種の議論は本来ただ一時の病的心理に出づるものであるにも拘らず、たまたまこれが東方民族の誇大狂に投合し、茲に東方の旧勢力は少からざる気焰を挙ぐるに至つたのである。」

そのうえで、胡適は続けて東西文明に関する彼の理解を述べている。

「東方文明の最大特色は「足ることを知る」にあり、西洋文明の最大特色は「足ることを知らざる」にある、足ることを知る東洋人は自ら簡陋の生活に安ずる故に、物質的享楽の向上を求めず、自ら愚昧に安じ、自ら「不識不知」に安ずる故に、真理の発見や技芸機械の発明に注意を拂はうとしない、自ら現在に環境と運命とに安ずる故に、自然を征服することを想はずし

て、唯天を楽しみ命に安ずることを想ひ、制度の改革を想はずして、唯分に安じ己を守ることがを図り、革命を想はずして、唯順民たらんことを願ふのである。」

彼は近年の西洋における物質文明に対し精神文明を尊重しようという風潮を批判している。一方、彼は西洋文明の最大の特徴は「足ることを知らざる」にあり、「足ることを知らざる」ことにより、真理を追求し、物質環境を変え、社会改造を実現することができる点にあると考える。彼は東洋の「楽天」、「安命」、「知足」、「安貧」などの精神を批判し、西洋文明の科学精神を称賛した。当時、第一次世界大戦を経て、ラッセルのような知識人が近代科学に対して反感を持つようになり、東洋の精神文明に解決策を求めていた。胡適がこの文章を書いたのは、東西文明に関する理解を述べるとともに、ラッセル流の物質的な文明と見なされる西洋文明を貶め、精神的な文明と見なされる東洋文明を推賞する風潮を批判するためであったのである。

胡適の観点をめぐっては、中国国内において論争が盛んに行われることになった。希祖と署名した「我們对于西洋近代文明的態度」²⁸の中で、胡適の観点を批判し、胡適が紹介する西洋の近代的資産階級文明は腐ってやがて滅亡する文明であると主張した。東西文化調和論を持っていた常燕生は東西文明について対立するのではないとより明確に論述し、両者は進行していく段階は異なっているゆえに、いわゆる東西文明の相違は古今文化の相違と同じであると主張した。²⁹東西文化調和論を批判し、西洋風を取り入れることを支持していた張東蓀は「西方文明与中国」³⁰の中で胡適の観点を称賛し、西洋文明を吸収し、同時に西洋文明の欠陥を見出す必要があると主張した。この文章は胡適の文章の足りない部分を補うものであるといえる。

さらに、1920年代の中国においては、新旧文化の優劣をめぐる論争も続いていた。ラッセルなどの西洋知識人の来訪により、中国の知識人や若者の間で文明に関する論争が一層盛んに行われていて、保守主義者にせよ、改良主義者にせよ、ラッセルの論点を通じて、自分の観点を補強しようとするものが相次いだ。第一次世界大戦後、中国がどのような文化を基盤にすべきか、どのような道を選んだらよいかについて、ラッセルの論点は中国の知識人たちを失望させたかもしれないが、その論点に基づき、多様な論争が行われ、中国における東西文化に関する認識の発展を促すという役割は果たした。一方で、明治以来欧米に追いつくことを目標にし続けてきた日本では、大正期に入ると文学・芸術を中心に中国を中心とした東洋文化への関心が高まり、いわゆる「支那趣味」が広まっていた。中国の古典世界への憧れがよみがえってきたのである。そこで折から中国を近距離か

²⁸ 希祖「我們对于西洋近代文明的態度」『政治生活』1926年7月。（『五四前后東西文化問題論戰文選』中国社会科学出版社、1989年3月）。

²⁹ 常燕生「東西文化問題質胡適之先生——讀《我們对于西洋近代文明的態度》」『現代評論』1926年8・9月。（『五四前后東西文化問題論戰文選』中国社会科学出版社、1989年3月）。

³⁰ 張東蓀「西方文明与中国」『東方雜誌』1926年12月。（『五四前后東西文化問題論戰文選』中国社会科学出版社、1989年3月）。

ら観察する機会を持ったラッセルに一部の日本人が関心を寄せるという現象も見られた。1920年12月5日に『大阪毎日新聞』にラッセルの「支那の第一印象」が掲載されたことはそのことをよく表している事例である。そうした雰囲気のあるなかで、1920年代において一貫して中国に関心を持ち続けていた改造社は古典の中国だけに関心を寄せるのではなく、読者に現代中国への注目を呼びかけ続けていたのである。改造社は直接に、そしてラッセルを通じて間接的にも、現代中国において何が起きているのかを観察し、また何が起きようとしているのかを見通し、それを読者に届けたのである。

おわりに

以上に考察してきたように、1920年代の雑誌『改造』は、結果としてラッセルを通じて辛亥革命以降の現代中国への関心を喚起され、中国の新しい様相を目の当たりにして、現代中国を日本の読者に紹介することになったという役割を担うことになった。またこの時期の『改造』の誌面には中国の社会運動に関する評論もしばしば現れるが、それにもラッセルの影響を見出すことができる。ただし、ラッセル、中国の知識人、そして日本の思想界はそれぞれお互いを必要としながら、それぞれに対する理解の面において同調する点と反目する点を共存させていたことを見逃してはならないだろう。

1920年代の日本においては、対内的な問題といえば、民主主義の運動や労働運動の前提を持っている社会改造であり、対外的な問題といえば第一次世界大戦後の大国間協調主義にもとづき国益を追求するというものであった。特に、対中国政策に関しては、中国の主権を尊重しながら、既得の影響力を保持しようという立場をとっていた。『改造』がラッセルの「愛国心の功過」を掲載したのは、彼の平和主義の見解を利用して、対外的側面においては中国の現状と未来を肯定的にとらえるという立場を読者に届けることを意図してのことであったが、その一方で、対内的側面においては、愛国心が内弊を改革するうえで不可欠であることを主張するものともなった。この点については、『改造』が中国の主権を尊重しながら、既得の影響力を保持しようとする日本の政治・外交的立場を支えることになってしまい、結果として、ラッセルの平和主義は消し去ってしまうことになったのだ。

また、1920年代に社会改造の問題に直面していた日中両国の知識人は、西洋から来たラッセルに社会改革の方法の教えを求めようとしたのだが、いずれも自国の現状へラッセルの思想の適用性に対して疑念を抱くことになった。さらに、日本の知識人は中国を観察するラッセルを見て、第三者としてラッセルの思想の適用性に対しても疑念を抱くことになった。結果として日本の学者たちも中国の学者たちも必ずしもラッセルの論調に諸手を挙げて賛意を示したわけではなかったのである。

そして、東西文明に関する視点に対しても、胡適のような「ヤング・チャイナ」にとっては、ラッセルが中国の古典文明を賞賛してしまったことは、多くの中国人が自国の文化を前にして有頂天に

なり、前進することを忘れる不都合を生み出すものと理解された。なお、『改造』がラッセルの中国文化への観察と胡適の反論を掲載したのは日本人の「支那趣味」の一側面を引き出しただけでなく、現代中国への関心も読み取れるのである。

ここから、ラッセル、中国の知識人、そして日本の思想界はそれぞれお互いを必要としながらそれぞれに対する理解を異にするような関係にあったことが明らかになった。結果として、ラッセルを日本に紹介するという『改造』の目論見は、その意図を大きく超えて1920年代以降に東洋・西洋が直面するに至った社会改造や文明融合など様々な大きな問題、変化を私たちに指し示してくれる貴重な里程標ともなっていたのだった。

付録：『改造』が掲載したラッセルの寄稿

タイトル	巻号
愛国心の功過	3巻1号 (1921.1.1)
過激派ロシアの前途	3巻2号 (1921.2.1)
現下の渾沌状態の諸原因	3巻3号 (1921.3.1)
社会組織の良否の分岐点	3巻4号 (1921.4.1)
工業主義の内面的傾向	3巻8号 (1921.8.1)
工業主義と私有財産	3巻9号 (1921.9.1)
工業主義と国家主義との相互作用	3巻10号 (1921.10.1)
華盛頓会議と極東の将来	4巻3号 (1922.3.1)
支那の国際的地位を論ず	4巻4号 (1922.4.1)
未開国に於ける社会主義	4巻5号 (1922.5.1)
先進国に於ける社会主義	4巻7号 (1922.7.1)
支那文明と西洋	4巻8号 (1922.8.1)
相対性理論	4巻10号 (1922.10.1)
機械主義に対する抗議	5巻2号 (1923.2.1)
道徳的標準と社会的幸福	5巻9号 (1923.9.1)